

2002 年韓国スタディツアー

日韓関係の未来と私たち

民権協では八月一二日から一七日にかけて「二〇〇二韓国スタディツアー～日韓関係の未来と私たち」(後援・(財)とよなか国際交流協会、(財)アジア太平洋人権情報センター、(財)日韓文化交流基金)を開催した。

今回のツアーには、大阪、埼玉、神奈川、新潟、石川、京都、兵庫、福岡など日本各地から、一〇代から六〇代までの一三名が参加した。また韓国からはハンシン大学日本学科の学生、放送通信大学の日本語学科の学生、日韓交流ハウスMARUMISOのスタッフの人たちなど二〇名を超える人たちが参加した。

今年で五回目を迎えた今回のツアーは日韓ワールドカップ共催を終えて、これからの日韓関係が注目されるなかにあって、日韓関係にとって本当に必要な相互理解はどのようなものを、韓国の人たちとの出会いと対話を通じて学ぶことを目的としたものであり、その目的は参加者の感想文にも記されているように、十分に達成することができたと思う。

現地でおこなったプログラムは大きく次の三つに大別できる。第一は日本の植民地支配がどのようなものであったのか、そしてそれをいまの韓国の人たちがどう受け止めているのかを知るとともに、戦争被害者に対する過去の清算が未だ不十分な現実と、それに対して闘い続けている人たちの思いを理解するためのプログラムである。

第二には朝鮮半島が南北に分断されていることの現実を体感し、朝鮮半島の統一の必要性を理解するためのプログラムであり、そして第三には、韓国の学生たちとの出会いと交流のためのプログラムである。

八月一二日、ツアー参加者たちは関西、成田、新潟、福岡の各空港からそれぞれ仁川空港に向かい、現地で合流した。事前に東京、大阪でのオリエンテーションはおこなったものの、ほとんどが初対面で、最初は緊張した雰囲気か否めない。空港でそれぞれ自己紹介をした後に、バスに乗り込みソウル市内へと移動。

六時頃に梨泰院にあるキャピタルホテルにチェックインし、そのまま韓国の人たちと待ち合わせをしている明洞に向かう。明洞にあるプリンスホテルの前では韓国の学生たちやMARUMISOのメンバーが私たちを待っていてくれた。今年初めて参加する人たちやこれまでも参加してくれた懐かしい顔が並ぶ。あいさつもそこそこに、さっそく夕食会の場所に移動しての交流会となった。

総数で三〇名を超えるメンバーでの交流会では、韓国の人たちが日本語を勉強していることもあり、参加者と韓国側の参加者の紹介をした後には、それぞれのテーブルで会話がはずんだ。すると突然、ある日本の参加者がちょうど誕生日を迎えたということでケーキがテーブルに出され、「ハッピーバースデー」の合唱。こういう韓国の人たちの心優しい気遣いは見ていて本当に嬉しいものだ。

翌日はまず独立門から西大門刑務所跡記念館を訪れた。館内を回りながら感じたことで

あるが、昨年の教科書問題の影響もあってか、学校単位で小さな子どもたちがノートを片手に見学している姿が目立った。

西大門刑務所跡には日本が如何に過酷な植民地統治をおこなったのかがさまざまな展示、資料によって示されているが、折しも日本では愛媛県で新しい歴史教科書をつくる会の教科書採択問題が争点になっている時期でもあり、日韓の歴史の捉え方、学び方のちがいを実感させられた。

歴史認識をめぐる日韓の溝をどう埋めていくことができるのかは、いかなる交流（それが文化であれ、スポーツであれ、青少年交流であれ）であってもそれが、本当に日韓の相互理解につながっていくためには避けて通ることができない問題であるということを感じてもらえたのではないかと思う。

この日は午後からはパゴダ公園、慶福宮、国立中央博物館、仁寺洞などソウル市内を見学して終えた。

一四日は都羅山駅と統一関連施設の見学である。一〇時にホテルを出発して、約一時間三〇分ほど電車に乗り臨津閣へ。そこで一旦電車を降りて乗り換えることとなるが、その乗り継ぎの一時間ほどの時間を利用して周辺観光ツアーへの手続きをおこない、臨津閣を散策する。都羅山駅は民間人統制区域にあるために、電車に乗るときには軍人（憲兵）が身分証と所持品の確認をおこない、電車で臨津江を越えて約五分で到着する。駅を出てそのままバスに乗り、第三トンネル跡、都羅山統一展望台などを周回した。私自身は一九九四年にも同じコースを回った経験があるが、そのときは「如何に北朝鮮が危険な国か」という宣伝と、警備にあたっている軍人たちの緊張した姿が印象的であったが、今回は非常に和やかな雰囲気、南北の緊張緩和が現場レベルでも感じられた。

一五日には韓国の学生たちとともにナムの家と日本軍「慰安婦」記念館を訪れた。

今回はナムの家で、中国から来られたカン・イルチュルハルモニから約一時間にわたってお話を伺うことができた。ハルモニは、自分が突然日本軍によってつかまり、慰安婦にされた経緯や、慰安所でのつらかった生活について語り、また解放を迎えても中国に置き去りにされ、五〇年以上中国で生活せざるを得なかったことなど、自らの境遇について語って下さった。

そして「正直に言うと日本人は死んでしまえと思う。でもここに来てくれている人たちにはそうは思わない。ほんとうにありがたいと思う」「私たちには別に欲心があるわけではない。自分たちのしたことが悪いことで、ちゃんと謝罪をして欲しいと思っているんであって、それは将来にとっても必要なことだと思っている」とツアー参加者に語りかけた。

午後からはソウルに戻り、それぞれハンシン大学、放送通信大学の学生のお宅にホームステイに移動し、思い思いの時間を過ごした。また翌日の自由行動日には、天安にある独立記念館を訪れる人たち、ソウル市内を観光するグループ、韓国NGOを訪問するグループなど、思い思いのひとときを過ごし、五泊六日のツアーを終えた。

五年間のツアーの経験を振り返って

民権協が主催しておこなう韓国スタディツアーも今年で五年目を迎え、これまでに日本、韓国の参加者をあわせてのべで一五〇名を超える人たちが参加しており、日韓の市民交流事業として定着しつつある。ここで五年間を振り返りながらスタディツアーの成果を整理してみると以下のようにまとめられると思う。

第一に、私たちのツアーは、日本と韓国の過去・現在・未来を、韓国に生きる人たちと等身大の目線で見つめ、語り合うことができるようなプログラムを心がけてきた。そのために参加するにあたっては特別な前提になる知識や考え方は求めるのではなく、むしろ韓国の人たちとの「出会い」と空間をともし、語り合うことでの「実感」を大切にすることで、これからの自分なりの韓国への関心や、関わり方への問題意識を深めることのできるツアーをコンセプトにしてきた。そしてこの五年間を通じて培われた多くの人たちの「出会い」が韓国に対する理解、あるいは日本に対する理解をより豊かなものにしてきたと思う。事実、スタディツアーをへて、韓国から日本に留学に来る人、あるいは韓国に留学する人も多く出てきており、スタディツアーにもほぼ毎年、リピーターが参加してくれることは、人との「出会い」が持つ魅力ゆえだろう。

第二に、ツアーを始めた九八年には金大中大統領訪日により過去の歴史認識について一定の政治決着が図られたように見えたが、しかし昨年の教科書問題に見られるように、いまだに日本と韓国(朝鮮半島)の関係を語る上で過去の歴史をどのようにとらえるのかが、最も重要な課題であるとともに、深い溝として横たわっている。

このツアーでは日韓市民の等身大の交流をめざしながらも、一方で真の相互理解のためには過去の歴史を学ぶことが不可欠であるという観点から、プログラムとして組み込んできた。毎年のツアーでそうであるように、韓国の人たちは日本の植民地支配に反省を持ち真摯に学ぼうとする人たちを、とても暖かく受け入れてくれる。そうした経験は歴史の事実を知ることだけでなく、歴史をいまに活かす姿勢を学ばせてくれる貴重な体験となっていると思う。また実はツアーを通じて、韓国の学生たちとともに行動することで韓国の学生たちにとっても貴重な学びの場を提供することにもなっている。こうした日本と韓国の人たちがともに学ぶことによって、草の根での歴史の克服過程を共有していることになっていると思う。

第三に、ツアーを通じて経験した、豊かな「出会い」と「学び」のなかで、ツアーはそれで完結するものではなく、さまざまな国境を越えたネットワークとしてつながりを広げており、いまでは日本各地の過去のツアー参加者や韓国でのツアー参加者がインターネットでの情報交換や日常的交流を広げている。

ワールドカップを終え、「ポスト・ワールドカップ」としての日韓関係をどう構想するのかが新たなテーマとして問われている。それは交流そのものの拡大であると同時に、交流の拡大が歴史を見据えた、真の意味での相互理解へとどうつながっていくのかという、内

実が問われているということであろう。

韓国スタディツアーを通じて共有してきた経験、そしてそれをもとに広がりつつあるネットワークは、「ポスト・ワールドカップ」を視野に入れながら、市民が主体となった日韓交流を進めていく上で貴重な成果と教訓を与えている。